学生参加をめぐる高等教育研究の現在と将来
―学生参加から学生参画へ―

2024年5月25日（土）

日本高等教育学会
第27回大会（鎌倉女子大学）
田中正弘（筑波大学）

学生参加（参画）研究

- 1990年代から2000年代にかけて、「学生参画」（Student Engagement）の研究が欧米で活性化
- 二つの潮流
  - 米豪：学生調査の研究（代表的な研究者：George Kuh and Hamish Coates）
  - 欧州：質保証への学生参画の研究
    - 「21世紀に向けての高等教育世界宣言」（ユネスコ 1998）
    - 「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン」（ESG 2005）

パートナーとしての学生

- 2010年代になると、「パートナーとしての学生」（Students as Partners: SaP）の研究が中心に
  - SaPは、「カリキュラムなど、教育に関わる意思決定・実施・調査・分析において、参加者全員が（必ずしも同じ方法でないにせよ）等しく貢献する機会を持つ、協力的かつ相互的なプロセス」（Cook-Sather et.al. 2014: 6-7）を意味する。

「参加」から「参画」へ

- Kay et.al.（2010）の分類
  ① 「評価者としての学生」（Students as evaluators）
    - 役割：アンケートなどに回答する間接的な情報提供者
  ② 「参加者としての学生」（Students as participants）
    - 役割：会議に参加し，意見を述べる直接的な情報提供者
  ③ 「パートナーとしての学生」（Students as partners）
    - 役割：教職員と対等な立場で教育改善に関与する専門家
  ④ 「改革者としての学生」（Students as change agents）
    - 役割：教育改善を立案し、その実現を主導する専門家

参加

参画

日本における「学生参画」研究

- 認証評価機関における学生参画研究の実施
- 学会紀要の特集テーマ：
  - 日本比較教育学会『比較教育学研究』第69号（近刊）
    - 特集のテーマ：「大学教育への学生参画の国際比較」
    - 特集の構成
      - 特集の趣旨説明：福留東土
      - イギリス：田中正弘
      - フィンランド：渡邊あや
      - スウェーデン：武寛子
      - アメリカ：Alison Cook-Sather
      - 台湾：楊武勳・林思敏
      - 日本：中里祐紀

三人の発表からの示唆（1/3）

- 学生が大学に失望したときに、彼ら／彼女らは暴徒化（演者化）する？
  - 「（大学、特に総長への）期待は見事に裏切られた。その失望感が秋以降の紛争拡大のための地下マグマとなる。」（吉見 2024: 8）
  - “When the movement began, the president kept quiet. Then, we realised that he joined the statements made by the eight university presidents. Some wording of the statement, like no confrontation and no violence, made us uncomfortable”. (Lo 2024: 7)

三人の発表からの示唆（2/3）

- 対話の重要性
  - “The closed-door dialogue helped improve the relationship (between the students and the university). … If there was not a private talk but only an open dialogue, basically the relationship would have broken… After the private talk, we knew both were suffering. While you had your problems, they had their worries.” (Lo 2024: 11)
  - 【学生からの質問】を受けて、
    - 「既に在籍している学生や教職員に対して、先に行うべきことがあり、権利保障が必要」という認識が醸成された。

【対応】につながった（高橋 2024: 13）。

三人の発表からの示唆（3/3）

組織に
代表は
不要

- 学生の代表性が重要
  - 「『大衆団交』するのはそこにいる『大衆』であって、山本君は『議長』であっても『代表』であることを拒絶しました。」（吉見 2024: 11）

ノイジーマイノリティに
陥る危険性

- 得られる示唆
  - 学生の「リーダー」は、自らの信念に従って行動し、その信念に賛同した仲間の代表として参画する。
  - 学生の「代表」は、学生全体の共益のために行動し、共益の実現のために仲間の代表として参画する。

論点

- 日本の学生に改革者として大学マネジメントに参画してもらうためには、下記の点について、学生と大学との合意書を作成する必要がある？
  ① 学生の誰が、
  ② どの会議に、
  ③ どの立場で、
  ④ 何を目的に参画すべきか？

賽は投げられた
！？

参考文献

- Cook-Sather, A., Bovill, C. and Felten, P., (2014) *Engaging Students as Partners in Learning and Teaching: A guide for faculty*, San Francisco, CA: Jossey-Bass
- Kay, J., Elizabeth, D. and Hutchinson, J., (2010) *Rethinking the Values of Higher Education-students as Change Agents?*, Gloucester: Quality Assurance Agency